

輩の中學校に通つた子供の頃は今の丸太町の千本以西には竹藪が生ひ茂り、冬の夜などきつねの鳴き廻るのは毎夜のことであつた。京都人には習慣になつて居る喰ひ残りの折を下げる、多分醉つてゐたのだらうが、門の石段まで歸りついた時に、ころぶはずはないのにころんだのに憤慨してどなり立てゝ母や女中に折を拾はせようとしても『父がだ』見つからない。ハゝーやられたのだなと氣がついたといふ聊かつまゝれ氣味の告白も現存する。

裏の離れの障子をあけると、秋は眼界紅葉に燃ゆる嵐山までおよぶ廣漠たるものであつたが、廿數年にして御覽の通りの繁昌だ。尤もその昔平安遷都の際には、こゝらあたりは皇城の域内として大宮人のはしやいだ所らしく、今もこの町の俗稱の一つとして殘る豊樂町の名は、そのかみ豊樂殿の所在たりし記念であるが、復古の機運のめぐり合はせか、隣には宿屋の看板を掲げて歌三味線で夜晝囃し立てる家も出來て、婉轉たる嬌音は寧猛なる蠻聲にからみ、しがない讀書子を惱ますこと夥しい。今も今、狂趣クライマックスに達したものか、絃歌耳を聾する如し、やんぬる哉と嘆息すれど、先方でやんぬらざる以上、何とも致し方なし。追つゝけ北側を電車がかよふ由なり。自動車は今すでに頻繁なり。轟々、轆轤、プーピー、ポーポー。しかして土地が繁昌するのだからとの理由の下に、受益税といふものを出させられる由なり。誠に以て恐惶頓首。祖先の地なれば叶はぬまでも死守したけれど、これでは到底覺束なく、逃げて行つたきつねのあとでも追うて、どこかの山の中にでもくすぼらなければ、この先き書物など讀めさうにも無之候。